

『おもろさうし』にみられる水に関する語彙

大竹有子

はじめに

本稿では『おもろさうし』の表現に登場する水を意味する語彙を俯瞰し、表現を分析し、オモロの表現者たちにとっての水の意味を考察する。

水に呪力をみとめることは世界中に普遍的にみられる事象であり、水には古今東西さまざまな役割が与えられている。禊ぎ・沐浴・洗礼のように、儀式において象徴的な意味で用いられる場合もあれば、養老の滝の説話や「菊慈童」のように、特別な場所や含有物のある水の服用によって、不老不死や特別な能力を授かるという事例などが想起され、また魔物を退けるとする事例もある（例えばトム・ミュア、東浦義雄・三村美智子訳『人魚と結婚した男 - オークニー諸島民話集』あるば書房、2004年）。こうした事例は、文字通り枚挙に暇がない。

それ以前にと言おうか同時にと言うべきか、水はまた、人間その他の動植物の生存に不可欠であり、命をつなぐ最低限の物質である。水というテーマは、それゆえに重要で膨大な内容をもつテーマである。日本民俗学の分野でも、水は大きなテーマのひとつであり、例えば柳田国男は「孝子泉の伝説」、折口信夫は「水の女」、「若水の話」などとしてまとめている。沖縄に関する研究としては、ニコライ・ネフスキーの『月と不死』が想起されるし、ほかにも個々の歌謡の解釈で言及されている（例えば池宮正治「玉を濯ぐ」〔おもろ研究会；1987〕、『おもろさうし』巻14-1004について）。

南島歌謡においても、水に関する表現（水そのもの・水の様々な形態・井泉のような水場など）は多くみられる。本来は古謡・琉歌・劇文学など南島歌謡全般から水というテーマを俯瞰すべきであるが、本稿では『おもろさうし』の事例を主な考察対象とし、南島の他の地域やジャンルの事例は可能な限り引用して比較しつつ、オモロの表現者たちは水にどのような力があると考えていたか、水という“もの”を登場させることによって、何を表現しようとしたか、について考察したい。

南島歌謡における水の意味を、本稿では以下の3つに大別し、以下で歌謡の事例をあげながら検討していく。

- ① 祭祀に関わり、霊力を持つ水
- ② 生命、生産を支える水
- ③ 日常生活に関わる水、風景としての水

①は、祭祀歌謡に登場し、霊力を持つとされる水の事例である。起源は天上世界に求められ、生命力を再生させる（孵る）力を持ち、あるいは政治的権力の基となる。単なる物質ではなく、信仰世界と関わる聖性の象徴である。

②は、人々や集落・国家が存在していく上で不可欠な水である。集落の人々は水に依って自らも生活しながら農業を行い、国家や為政者を支える。為政者は祭祀や治水などによって水を司ることで、国家を支え、人々の生活を安定させる。後者については末次智氏が、オモロにおける王は雨乞いなどの国家儀礼を通して雨を司ることで、村落（とその構成員）との相互関係を築き、支配者の地位を固めていた「水の王」であったことを、古代日本・朝鮮における事例を参照しながら指摘されている（『王と水』末次：1995、p139～155）。

②は①のように、再生や他界との関わりが強調される霊力の象徴ではないが、集落や国・為政者との関わりという政治性や公共性を帯びている。言い換えれば、①は神と人の関係であるが、②は主に人間どうしの関係である。ただし祭祀は重要であり、神も大きく影響を及ぼす。また人民・為政者どちらにおいても、生活や生命を維持する上で、水が必要不可欠であることは切実である。そうした意味で、②は①に比べて人間の生活により近いが、単なる物質ではないという点で共通する。

③は、飲む・身体を清めるなど、すべての人々が日常の衣食住において必要とする水の事例で、生活用水と言い換えられる。個人の叙情に訴えかける風景としての水もここに含む。また③は、①や②とは性格が決定的に異なる。②とは、人間と水との関係という点では共通するが、公共性がなく個人の日常生活に関わる事例という点で異なる。つまり③は、祭祀とも政治とも関係しない、単なる物質としての水である。

『おもろさうし』には、水に関する語彙が60例みられる。水に関する語彙とは、具体的には、水を意味する語が32例、清水を意味する語が29例、泉を意味する

語が9例みられるが、語彙によって歌謡における意味が異なる。ほかに、雨や露・雪は形態が異なるだけで、成分は水と同一の物質を指すが、本稿では考察の対象を原則として水そのもののみとし、以下で実際の事例をみながら検討する。

なお本文中における事例の引用については、『おもろさうし』は原則として外間守善・校注『おもろさうし』上下（以下「岩波文庫本」とする）、古謡については外間守善・総編集『南島歌謡大成』全5巻（以下『大成』）をテキストとした。本文・語彙の解釈については、主に『沖縄古語大辞典』を参照した。テキスト引用の詳細については、文末の注を参照されたい²。

1. 水（みづ）

ここでは、「水」を意味する語彙の中で、「みつ」あるいは「みづ」と表記される事例（以下は基本的に「みづ」に統一）についてみていく。オモロにおいて圧倒的に多いのは、霊力を持つ水（先の分類では①）について「みづ」という語彙が用いられる事例である。この場合の水は生命力を蘇生させる力をもつ呪物であり、多くは貴人に差し上げるものである。そうした事例での複合語としては「解で水」（巻5-255・283、巻7-346、巻19-1289など）、「搔い撫で水」（巻7-348、巻17-1222、巻18-1252など）、「貫き上げ水」（巻17-1222、巻18-1252など）がある。「解でる」とは再生するという意味であるから、「解で水」とは再生、変若の水という意味である。「搔い撫で」とは、撫で慈しむように大切にす意であるから、そうした心情が籠もった水といった意味、「貫き上げる」とは（貴人に）捧げるという意味であるから、献納する特別な水といった意味になる。複合語を概観すると、「水」を修飾する部分に、水が持つ力や意味が明確に表現されている。

こうした水の再生の力を受け取る主体は、オモロでは2つのパターンに分けることができる。ひとつは、王・按司といった貴人が、生命力や統治の力を得るといったパターン、いまひとつは神女が玉を水で濯ぐことにより、玉の霊力を更新するというパターンである。

1 1. 霊力のある水を支配者に捧げる事例

まずは「水」の中でも最も数が多い、国王・支配者といった貴人に、再生の霊力を持つ水を捧げるという事例を検討する。

又 みやでらの すでみづ 円覚寺の解で水を

おぎやかもいに みおやせ 尚真王に奉れ
ともゝす系 とひやくさす ちよわれ

千載後までこそ ましませ

〔巻5-283〕

引用部分は、叙述すべき事柄が展開される部分（波照間：2008、p31参照）である対句部に「解で水を王にみおやす」とあることから、貴人に再生の水を捧げる明白な事例の一つである。生命を再生させる「解で水」は、国王に奉られる。引用部分の前には、「宮寺（円覚寺）」を建設し、「上下/地離れ」すなわち国中が心を合わせているという内容がある。偉大な事跡を残し、国中の心を集める国王は、聖なる再生の水を奉られる存在である。こうした対句部の大意をまとめると「千載までましませ」という反復部に集約される。その望ましい状態を実現するのが、王が自ら創建した円覚寺（「宮寺」）の、生命を再生させる聖なる水である。

- 一 おざのたちよもいや 宇座の泰期思い（人名）様は
いぢへきたちよもいや 勝れた泰期思い（人名）様は
かがみいろのすでみづよ みおやせ 透明で霊力のある水を奉れ

〔巻15-1119〕

「泰期思い（たちおもひ）」とは、1372年に初めて明への使節として進貢を行った泰期を指すと解釈される（『沖縄古語大辞典』、岩波文庫本脚注、『沖縄県の地名』p383「宇座村」）。この事例では「泰期思い」が「鏡色の解で水」を奉られる対象である。

反復部ではオモロのテーマが集約的に示されるから（波照間：2008、p31）反復部に登場する「鏡色の解で水」は単なる清澄な水ではなく、「泰期思い」に身に付けて欲しいと願う力を、象徴的に表していると考えられる。岩波文庫本の脚注では「鏡色の解で水」を「生命力を蘇生させる透明な清めの水」と解釈しているが、水という物質には、貴人（泰期）に奉る、再生する（解でる）生命力が仮託されているのである。

この水には「解で」以外に「鏡色の」という美称が付されている。実際にオモロの表現者たちがどのような色（の水）を意識していたのか、という点については、想像の域を出ない。「かがみ（鏡）」という語のオモロでの事例はこの箇所

みであり、道具の意味では用いられていないため、鏡という道具についてのオモ口における位置づけや役割を検討することもできないが、道具としての鏡から類推して、透明さや濁りのないさまを表していると考えられる。

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 一 たかがわの <u>みづ</u> の | 高川の水は |
| [よ]こすものやてや | 導いてきたもの(水)であるから |
| <u>のきあげみづ</u> | 貴人に差し上げる水 |
| <u>かいなでみづ</u> せまし | 大切な聖なる水にしよう |
| 又 おやがわの <u>みづ</u> は | 親川の水は〔巻17-1222、重複1252〕 |

「高川(たかかは)」とは「川の水を引き井堰を高くした井泉」のことであり(『沖縄古語大辞典』p385)、それを直後に「寄越すもの」と言い換えている。通常の井戸から汲んだ水ではなく、井堰を高くする工程を経た、貴重な清水である。巻15-1119と巻17-1222は、清冽な水は聖なる力のある水であり、このような水は貴人に捧げるといふ発想の事例である。

以上の事例には、献上された水がどのように使用されるのかは述べられていない。しかし民俗事例や次の事例から、用途やその意味を推測できる。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 一 こはりきもよりや | こはり肝寄り神女は |
| あんのきもよりや | 我が肝寄り神女は(お祈りします) |
| てにのてだ | 天の太陽神は |
| あぢおそい まぶら | 国王様を守ろう |
| 略 | |
| 又 しより ふる あめや | 首里に降る雨は |
| <u>すてみづど</u> ふりよる | 暎で水こそが降っている |
| 又 ぐすく ふる あめや | 王城に降る雨は |
| <u>わかみづど</u> ふりよる | 若水こそが降っている〔巻7-386〕 |

上の事例では、霊力のある水が雨として降る、とうたわれている。反復部の内容から、暎で水・若水の力が国王に降り注ぎ、こうした力を得ることを祈念することが分かる。

水の力を取り込む方法は、直接身体に付けることである。「ウビナディ(御水撫で)」として額につけること(ちなみに「水撫で」という語彙は琉歌に登場する)、若水を浴びることなどが想起される。若水は沖縄に限らず、日本でも正月

に行われることはいうまでもない。また、ニコライ・ネフスキーが『月と不死』でまとめた、神が解で水と死に水を用意し、人間には解で水を浴びさせようとしたが、蛇が先に浴びてしまったために人間は死ぬ運命になった、という宮古の伝承も同源である（ネフスキー：1994〔1971〕）。

巻7-386のオモロでは、解で水が国王のいる首里に雨として降り注ぐという壮大な発想である。雨として降り注ぐ聖なる水を、浴びるという形で身体に取り込むことにより、国王は生命力や霊力を更新するのである。

一	きこゑ大ぎみぎや	聞得大君が
	おぼつたけ あつる	おぼつ嶽（天上の聖域）にある
	<u>すでるてうみつよ</u>	<u>再生の特別な水</u> を
	かみぎやきもやてや	神の御心であるから
	いつこしま おろちへ	兵士のいる島に降ろして
	<u>かいなでみつ</u> しめまし	<u>聖なる水</u> にさせたい
又	とよむせだかこが	名高い精高子（聞得大君）が

〔巻7-348〕

「巖子（いつこ）」は兵士または人民の意であり、「巖子島」は兵士のいる島の意であるが、一般的には首里の言い換え表現である。首里に降ろすということは、すなわち首里にいる国王のものになりたいという意味である。「おぼつ嶽在つる解でる上水」という表現から、再生の力を持つ聖なる水は、もとは天上世界（おぼつ）の聖域にあることが分かる。他界を、権力や霊力の原郷とみなす観念も垣間見られる表現であり、他界からの水であるという来歴は、国王が受け取る再生の力をより強調しているといえよう。

事例を並べてみると、水は再生の力を持つ聖なる物質であり、清冽な水（の力）は王や貴人に捧げられるべき重要なものであることが改めて分かる。この点は、冒頭で概観した先行研究でもたびたび触れられている（ネフスキー；1994〔1971〕、池宮：おもろ研究会；1987）。

1 2．霊力のある水で神女が玉を濯ぐ事例

ここまでは、貴人・国王に聖なる水を捧げるという事例をみてきた。支配者たちは聖水を受け、再生や神聖性といった水の力をみずからのものとして、権力者たりえる力を更新している。

水の力は、しかし支配者にのみ関係するのではない。南島において、玉飾りは神女の宗教的権威を象徴するものであるが、そうした玉飾りを水ですすぐという儀礼があることが、オモロや古謡にみられる。以下では、神女に関わる水の事例をみている。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 一 ひやむざよそぎがわ | 平安座島の濯ぎ井泉で |
| <u>てもち よすぎいぢへて</u> | <u>手持ち玉を洗い清めて</u> |
| くにてもち | 国手持ち玉を |
| おぎやかもいに みおやせ | 尚真王に奉れ [巻16-1154] |

玉を洗い清めるのは、「濯ぎ川」の水である。こうした儀礼の事例では、水は玉が持つ霊力を更新するための物質となっている。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 又 きこゑ大ぎみぎや | 聞得大君が |
| あさかわに ちよわちへ | 親川（知念大川）に来給いて |
| <u>すてみつは 召しよわちへ</u> | <u>聖なる水をお召しになって</u> |
| けおのうちに 在つる | 京の内にある |
| もくちのてもちへ | たくさん手持ち玉 |
| 又 きこへあんじおそいぎや | 名高い国王様は |
| あさかはに ちよわちへ | 親川（知念大川）に来給いて |
| <u>すてみつは めしよわちへ</u> | <u>聖なる水をお付けになって</u> |

[巻7-346]

引用の事例にみられる「躰で水」は、聞得大君や国王が「召しよわちへ」と表現されている。「召しおはる」が持つ意味としては、岩波文庫本が採用している「付ける・着る」のほか、「お飲み（食べ）になる」もあてはまる（『沖縄古語大辞典』）。「付ける」という解釈は、聖水で顔を撫でる「ウピナディー（お水撫で）」を踏まえた解釈と思われるが、「躰で水を（飲んで）身体に取り込んで」という解釈も可能であろう。

岩波文庫本はこのオモロについて「あさ川の躰で水で、手持ち玉を濯ぐ」と解釈しているが、反復部は対句部を集約する内容であるため、躰で水と手持ち玉が直接関わるものであるとは断定できない。しかし、反復部に玉が登場するということは、水を召した結果が、象徴的に手持ち玉の霊力に反映されると考えられる。

引用の事例で「手持ち」と表現される玉飾りは、宗教的権威を表すほかに、

「島かねる御玉」〔巻12-692〕という表現にみられるように、国を統治する霊力を持つとされる場合もある。玉と水は、共に聞得大君の霊力を反映するものであり、巻7-346のオモロでは「洗う」「濯ぐ」といった語は用いられていないが、巻16-1154のような事例から、玉を水で濯ぐことが行われていたと考えられる。宗教・政治的権力の象徴である玉を、霊力ある水で洗ったり濯いだりすることによって感染呪術的に水の力が玉に移り、その玉を身に付けることにより、着用者は間接的に水の力を取り込むのである。

神女と水との関わりについては、他の地域でも同様の事例がみられる。なお、次の事例のように該当部分の引用が長大になりすぎる場合は、歌謡本文の表現を確認する必要がある部分以外は「略《大意》」と表示し、省略部分の大意のみを示した。

「おれオモリ」

9 きよらや おおかみ	美しや大神
10 みなや ねぬかみ	美しや根の神
11 ききよ のぼて	清川に登って
12 さじきよ のぼて	浄川に登って
13 <u>きゆき とてからや</u>	<u>清川の水を浴びてからは</u>
14 <u>しょうじ とてからや</u>	<u>浄川の水を浴びてからは</u>
略《大意》一つの神殿に降りて / 神の神殿に直って	
17 うれて うれふさを	降りて降り栄えよう
18 うれて おれなをそ	降りて降り直そう

〔奄美篇：オモリ2〕

この事例は、『大成』後注によると奄美の大熊（名瀬市）ノロのオモリである。下線部はノロが聖なる川の水を浴びる様子を描写しており、その後に聖域に降りるといふ描写で結ばれている。同様の表現は「のろぬ君川祭り」〔奄美篇・オモリ23〕にも見られる。

このオモリでは「ききよ（清川） / さじきよ（浄川）」の「きゆき（清川の水） / しょうじ（浄川の水）」という表現以外に水の力に関する説明はないが、山下欣一氏が奄美のユタの呪詞に関して「ショージ」としてまとめられている儀礼に、実際の様子をみることが出来る。山下氏はユタの事例を主にあげておられ

るが、大熊ノ口のフウンメの祭りの場合も紹介されており、それによると、祭り当日朝にノ口をはじめ神女たちがトネヤに集まり、クングョ・キキョという谷川に登って白衣で水をかぶる（山下；1979、p 500-501）。ノ口の儀礼において「きゆき（清川の水）/しょうじ（浄川の水）」とは、祭祀の前の禊ぎの水であり、身を浄めるという力（役割）を持っている。

池宮氏の論考（「玉を濯ぐ」池宮：おもろ研究会；1987）では、井戸（の水）で濯ぐという表現のある大宜味村根路銘のウマイガキが、玉ではなく神女自身の水浴びと解釈されている事例を紹介している。水を浴びるという事象に限れば、大宜味村のウマイガキも奄美の「おれオモリ」も、同様の信仰に基づいている。オモロでは王や王府の高級神女が、力を受け取る側であったり、水の力で玉を濯ぐ立場にあるが、各地の古謡では王府の権力と関わる面がない。山下氏によると、奄美のユタが行うショージは、聖なる名を唱えて神と一体化する儀礼であるが、ノ口のショージ儀礼は霊力を持つとされる水を浴びて、祭祀の前の禊ぎをすることにある。ノ口の儀礼にしてもユタのそれにしても、神とノロ・ユタとの間の儀礼であり、オモロにおける王のような、最終的に力を「みおやす」相手はいない。水による生命力の更新という考え方の基盤そのものは南島でも普遍的にみられるが、それを国王に向かって集約させようとしている点に、祭祀歌謡であるオモロの政治性が具体的な形で表れている。

1 3 . 生命を支える水の事例

一方で、水は聖なるものというだけではない。むしろ万人の生活に不可欠な物質である。それを再確認させる「みづ」の事例は、オモロでは、今まであげたような霊力を持ち王や神女と関わる水の事例と比べて、数は多くないが散見される。

- | | | |
|---|-------------------|---------------------|
| 一 | あかのおゑつきや | 阿嘉のお祝付きは |
| | ねはのおゑつきや | 饒波のお祝付きは |
| | しよりしゆ | 首里こそ |
| | もゝうら ひく ぐすく | 国々を引き寄せるぐすくだ |
| 又 | しよりおやひがわ | 首里ぐすくの親樋川は |
| | <u>みづからど 世がける</u> | <u>水からでこそ 世を治める</u> |
| 又 | ぐすくおやひがわ | 首里ぐすくの親樋川は 【巻8-436】 |

水は生活に欠かせないものであるだけに、政治の要でもある。上の引用部分も

同様の意味であり、それは「世掛ける」の前に「水からど(水からぞ)」と、強調表現を用いているところにも現れている。生命を支える水の貴重さは「みづ(水)」よりも「さうづ(清水)」の事例においてよくみられるが、「水」の事例においても、数は少ないもののみることができる。次に引用するのも同様の事例である。

- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| 一 あかのこが | 阿嘉の子が |
| ねはのこが | 饒波の子が |
| もゝぢやらのぶれおもいてだ | 多くの按司が敬愛する君主だ |
| 又 大ざとは さとからる | 大里は、豊かな集落によってこそ
(栄える) |
| 又 <u>かでしがわ みづからる</u> | <u>嘉手志川は、豊かな水によってこそ</u>
(名高い) |

〔巻8-438〕

上の事例では、嘉手志川の水に触れている。嘉手志川は糸満市大里の北端にあり、古くから豊かな水量で知られていた。『琉球国由来記』〔巻12-272項〕は、この川について2題の逸話を掲載している。一つは干ばつのときに濡れた犬が山中から出てきたことから発見されたという由来、いま一つは尚巴志(「佐敷小按司」)が島尻大里按司に金屏風を所望され、嘉手志川と交換したという話である。尚巴志は自分に味方する者には嘉手志川の水を与え、そうでない者には水を用いることを禁じたため、大里按司は人心を失ったという。

この2つの逸話は、生命と生活を支える水の重要さを端的に表している。動物の行動がきっかけになって泉や川が発見されるという話は、沖縄各地のみならず日本でもみられるが、背景に神意を匂わせる。このオモロは、表現の上ではこうした背景に触れてはいないが、読む者に上記の逸話を想起させる。ことに尚巴志と大里按司の逸話は、生活のための水の確保と政治的な力との関わりを示し、そのことは引用の下線部分に、端的に表れているといえよう。

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 一 きこ糸くになおり | 名高い国直り 地名 は |
| いりて <u>みづ こ糸ば</u> | <u>入って行って水を乞うと</u> |
| <u>みづ なきやん</u> | <u>水は無いと言って</u> |
| <u>まみき いぢやす</u> まくに | <u>真神酒を出す豊かな国だ</u> |

又 とよむくになおり

名が轟く国直り 地名 は

[卷14-1043]

上に引用したのは、湯きをいやす飲料水としての事例である。ここで強調されるのは「国直り」(中頭郡嘉手納町国直)の豊かさであり、その比喻として、水の代わりに酒を用いるとされている。同様の表現は「泉」の項でもみられる(「御酒/真神酒や 泉ど し居る」巻16-1172)。

ここで、オモロ以外の古謡の事例についてもみてる。

「浴水^{ママ}ね祭り」

- | | | |
|------------|-------------------------|------------------|
| 42 たけぬこぬ | むとうからどう | 嶽の川の源から |
| 43 ふきじたん | きよらむいずい ^{ママ} や | 湧き出たところの清らかな水は |
| 44 あまたれてい | | あちらに垂れ |
| 45 くうまたれてい | | こちらに垂れて |
| 46 たまぬあざは | とうてい | 玉のあざ葉 すすき をとって |
| 47 あまだれぬ | みすぎ もりたていてい | 甘い(おいしい)御染は盛り上げて |

略《大意》線香と御染の初を、三方三頂なる神に捧げます

石/玉のように立派な実りをとらせ給い、産んだ子/育ての子が

- | | | |
|-----------|-------|-------------|
| 68 ききご | とうりん | 清浄な川で沐浴して |
| 69 もけえ | とうりよん | 迎えますことが |
| 70 いしぼらさぬ | | いし誇らさ(嬉しくて) |
| 71 たまぼらさぬ | | 玉誇らさぬ(嬉しくて) |

[奄美篇：オモリ59]

引用部分は奄美の事例であるが、「きよらむいずい(清ら水)」の用途が、祭祀の供物である染の材料(47節)、農業用水(64・65節)、沐浴のため(68節)と3つ描かれている。オモロでは、水によって世を治めるとか、名高いといった表現がなされるが、いずれも抽象的である。これに対し、上の事例では、水の恩恵が具体的に表現されている。このような水の用途の具体的な描写による、いわば生活感は、同じような題材であってもオモロにはみられないものである。

1 4 . 抄括

「みづ」または「みつ」と表記される事例の分析をまとめると、オモロでは聖なる水という、霊力ある物質としての事例が大半を占めることは、必然的ながら

特筆すべきである。その大半は国王や支配者に捧げられるものであり、結果として治世の永続をもたらすという、政治的な目的につながっていく。聖なる水としての事例はあるが、神女や玉が関わる事例も、数は少ないがみることができる。また、これも聖なる水としての事例よりは格段に事例数が少ないが、日々の生活を支える重要な物資としての水の実例も散見される。

2. 清水(さうづ)・泉(いでみ)

「清水」を意味する語彙は『おもろさうし』には29例あり、「さうす」または「さうず」と表記されている(以下「さうづ」を採る)。『沖縄古語大辞典』の「さうづ(清水)」の項には、「清水。湧き出る清い水」とある。物質としては「さうづ」も「みづ」も同じであるが、意味合いが異なる。上に引用した『沖縄古語大辞典』の定義では、ただの水ではなく清水であること、何よりも、湧き出る、つまり泉であることが、単なる水との違いであるということになる。

事例を比較すると、「清水」についての事例は、聖なる物質としての性格も揺曳しながら、命を支える水(冒頭の分類②)としての事例が多いことが、特徴としてあげられる。

2 1. 聖なる水としての用例

まずは「みづ」の場合と同じく、聖なる力を持つ事例からみる。

一 くめのこいしのが	久米のこいしの神女が(お祈りします)
世のいきつぎの	世の最高の
世のてもち みおやせ	美しい手持ち玉を(按司様に)奉れ
又 もうらこいしのが	百浦こいしの神女が(お祈りします)
又 おとしようかわ おれわちへ	おとしよう川に降り給いて
又 わくさうず おれわちへ	湧く清水に降り給いて

〔巻11-612 重複1465〕

上の事例は「おとしよう川」(井戸の名)と対語になっていることから、水そのものではなく井泉、水場をさしていることが分かる。反復部は手持ち玉を捧げるという内容であるが、巻7-346の例でみたように、反復部にみられる玉は、対句部にある水の力を象徴的に表すと考えられる。

「さうづ」という表記の場合、水の再生の力にはあまり触れられないが、特に

上の事例にあるように、神女が「さうづ」に降りて儀式を行うという事例は例外的である。「おとしよう川 / 湧く清水」は、水が湧きでる場所の意味合いが強いのであって、水そのものをあらわす語彙は、このオモロでは表現されていない。しかし、神女や玉に関わって登場する「清水」は、聖なる清めの水であるには相違ない。

又 うきおほぢが おわにや	祖先が居られるのだろうか
えんげらへ あらまし	立派な建物があるようだ
又 くむさうづ やちよむ	美しい清水さえも
みちへいぢへ いき めばまし	見て出て命を延ばしたい
又 くたるつぢやちよむ	踏んだ頂さえも
みちへいぢへ あよ めばまし	見て出て命を延ばしたい

〔巻11-557 重複1409〕

上に引用したのは、巻11-557の混入部分である。ここでは「くむさうづ（雲清水）」すなわち美しい清水は、「くたる頂」と対語になっている。ここでいう「清水」は自らが霊力をもつものではないが、「うきおほぢ（大祖父）がおわにや」と、祖先の跡を感じさせ、見ると「いき（息） / あよ（肝）」すなわち命や心を伸ばすという作用がある。「水」の項でみたような変若水とは異なるが、この場合も水が持つ霊力を背景にした表現である。

以上であげたのは、「清水」の事例の中で、聖なる力を持つ水の場合であるが、これに類する事例は、ほかに巻11-572をあげられる程度である。

古謡においても、上と同様の意味での「清水」の事例がみられる。

「トゥハシリウムイ」

34 なんざさく	銀酌を
35 うひさいらでい	たくさん選んで
36 むゆるどうむ ひならん	盛れども減らない
37 <u>いぢみそーぎ</u>	泉清水
38 <u>わきそーぎ</u>	湧き清水
39 いちむさかいん	いつも栄える

〔沖縄篇・ウムイ293〕

引用のウムイは、原注に「家の新築祝のオモロ」とある。題名にある「とうは

しり」とは、オモロや古謡では「十走り」の字を当て、対語の「八走り」と共に、走り戸のことと解釈される(『沖繩古語大辞典』p470「とをはしり」項)。

赤嶺政信氏によると、民間解釈でも家の出入り口や十柱の神を拝む場所であり、家屋の部位の名称という点では歌謡の解釈と共通する。ただし赤嶺氏は、沖繩をはじめとする南島各地の民俗事例の分析から、本来は柱(中柱)に宿る家の神とする見解を出している³。ここでどちらかを断定することはできないが、歌謡の解釈においても、トゥハシリという語が建物の部分の名称に止まらず、建築儀礼や信仰に関わる名称であることを考慮する必要がある。

上のウムの37～39節は、建築した家の繁栄を言祝いで締めくくる部分である。ここでは家の繁栄の比喻として、絶えず泉に湧く清水をあげていることに注目したい。湧く井泉を繁栄の比喻とする発想としては、次のオモロがあげられる。

一 あかのおゑつきや	阿嘉のお祝付きは
ねはのおゑつきや	饒波のお祝い付きは(言祝ぎます)
ともゝと ちよわれ	(領主様は)千年もまませ
又 <u>あしかわの あらぎやめ</u>	<u>父祖からの井泉があるかぎり</u>
<u>くもさうず あらぎやめ</u>	<u>清冽な清水があるかぎり</u>
又 いしぎやのちてば	石(のように堅固な)命といえは
いしは われる物	石は割れるもの(であるが)
又 かねがのちてば	金属(のように堅固な)命といえは
かねは ひぢやむ物	金属は曲がるもの(であるが)

[巻8-466]

引用のオモロは、反復部にあるように支配者の末長い治世を祈願する内容であり、「あしかわ(あし川・井泉名)」・「くもさうず(雲清水)」が、その比喻となっている。「あし川」とは現系満市山城の集落東方にある井戸の名で、「あし」とは祖先を意味する「あさ」に由来する美称である(『沖繩古語大辞典』・岩波文庫本脚注)。「雲清水」の「雲」は、「くもこだけ(雲子嶽：立派な御嶽、巻3-100、巻9-490)」や「くもこいろ(雲子色：美しい色、巻4-203、巻12-738)」の「雲子」と同様に、美しい・清冽なという意味の美称である。つまり、井泉の清冽な清水が常に湧出するように、末永く統治するようという内容である。

このオモロで注目されるのは、最後の2節である。「あし川/雲清水」に対し、

用した嘉手志川の水をめぐる『琉球国由来記』の記事を参照すると、祭祀のような信仰世界に関わるというよりは、生産を支えるという面に注目されていると解釈したほうが自然である。

一 おもろねやがりや	おもろ音揚がり（オモロ歌唱者）は
世のさうず 出ぢやちへ	世の中の幸福をもたらす清水を湧き出させ
かみてだの そろて	神や太陽神がそろって
まぶりよわちへ	守りたまえ

又 せるむねやがりや 宣るむ音揚がりは 【巻8-399】

上のオモロは「出ぢやちへ」という動詞から、井泉というよりは井泉の水そのものを指すと思われる。「世の清水」と修飾されており、「世の清水」は「世の中の幸福をもたらす清水」と解釈することができる。また反復部の続きに「神てだの揃て 守りよわちへ」とあることから、神々も泉を重視し見守ると解釈できる。「神てだ」が守るのは、単なる清水ではなく国家そのものであるが、ここでいう清水は、世の人々が日々の生産に励み、生命を支える水であり、それを見守る神々も関わる内容である。人々の生産活動は為政者や王府を支え、為政者が国家として祭祀を行うことを考えれば、世の人々の生産や生命を支える水は、神々にも繋がる。こうした事例からは、冒頭に②として挙げた生命・生産を支える水が、①祭祀に関わる水のように霊力・他界などと直接繋がらなくても、神が関わる神聖なものという側面をも持つことを指摘することができる。この点は、後述する宮古の「袂い声」〔宮古篇・タービ2〕の事例においても同様である。

一 おぎやかまぢよくもい	おぎやか真強く思い（人名）様が
おこのみの たかさ	ご計画の（井泉の）高さよ
ぐしかわ わくさうず げらへて	具志川に清水の湧く井戸を造って

【巻11-638 重複1448】

「げらへる（接続形・げらへて）」とは、建築物を造営するという意味である（酒を醸すなどの意味もある）。よって、ここでは「清水」と言っているが、実際には清水の湧く井戸そのものを指している。

清水を「げらへる」という事例は、上に引用したオモロの重複オモロである巻21-1448の他、巻14-1019、巻15-1080にみられる。井戸の造成を讃美している事実は、井戸すなわち水が、生命や生産を支える重要なものであることを示している。

集落における水の重要さを表す古謡の例としては、宮古の「袂い声（ハライグイ）」が想起される。

「袂い声」

- | | | |
|----|--|---|
| 36 | <u>いシ</u> が <u>かーぬ</u> <u>みずざ</u>
<u>かんぬ</u> が <u>かーぬ</u> <u>みずざ</u> | <u>磯の井戸の水</u> は
<u>神の井戸の水</u> は |
| 37 | <u>みず</u> <u>いきり</u> や <u>がり</u> ば <u>まい</u>
<u>ゆー</u> <u>いきり</u> や <u>がり</u> ば <u>まい</u> | <u>水量</u> は <u>少ない</u> けれど
<u>湯（水）量</u> は <u>少ない</u> けれど |
| 38 | <u>みず</u> <u>んまさ</u> や <u>り</u> ば
<u>ゆー</u> <u>んまさ</u> や <u>り</u> ば | <u>水</u> は <u>旨い</u> ので
<u>湯（水）</u> は <u>旨い</u> ので |
| 39 | <u>シ</u> と <u>うぎ</u> <u>みず</u> <u>なり</u> よ
<u>いのイ</u> <u>みず</u> <u>なり</u> よ | <u>染水</u> になるのだ
<u>祈り水</u> になるのだ |

〔宮古篇・タービ2〕

上のタービは、部落創成の神が村立てをするために水源を探し歩くという叙事的な内容である。神が自ら水を検分し、水源によって村立ての場所を特定するという点に、水の重要さが表現されている。「染水／祈り水」になりうるという理由での井の水の評価は、祭祀に関わる聖なる水の探求であることを示す。一方で、部落を立てる目的はすなわち生活するということであり、水は農業生産にも生活にもつながる。そうした意味で、上のような事例は、聖なる水と生命を支える水との両方の意味を含むといえる。「袂い声」では神みずからの探求によって、オモロでは井戸の造成や「羨む」という表現が、生命と生活を支える水の重要さを示している。

2 3. 泉（いでみ）

泉は、オモロでは「いちへみ」・「いちゑみ」・「いちみ」と表記される（以下「いでみ」で統一）。本土語の語源は「出づ水」であるが、沖縄語は「出で水」で、地中から湧き出る水の意味である。実際には「いでみさうづ（泉清水）」〔巻2-49、巻2-70、巻15-1080〕の語形で、清水または清水が湧く泉を意味することが多い。「いでみ」の事例数は、全体では9例であるが、「さうづ」と複合語になっていない事例は巻16-1172に2例、巻14-1035に1例みられるのみである。

「泉清水」の事例は、「清水」の事例とほぼ重なる。ただし巻8-399、巻11-638の「清水」の事例にあったように、王に奉る力の源であったり、神女が関わった

りする聖なる水としての性格は薄れ、人間の生命や生産を支える水（冒頭の分類

②）として登場する。

- | | | |
|---|-----------------|---------------------|
| 一 | きこゑぐしかわに | 名高い具志川に |
| | しけちなは まさうず | しけちなは（具志川）の真清水 |
| | しまよのかほうさうず いちへみ | 島中に果報をもたらず清水であり、泉だ |
| 又 | とよむぐしかわに | 鳴り轟く具志川に 【巻16-1159】 |

上の事例では、「清水」・「泉」に「島世の果報」という美称辞が添付されている。沖縄のような島嶼では、水は不足しがちなものであるだけに、具志川の泉は貴重な存在となっている、という事実が「島世の果報」という美称として表現されている。同様の表現として「肝あくみの泉清水」（巻14-1035）があげられる。他には「泉清水 げらへて」〔巻15-1080〕のように井泉の造成をうたう場合があり、この事例は「さうづ」の項でみた。

「いでみ・さうづ」という複合語ではない場合は、上記の場合とは意味合いが異なる。

- | | | |
|---|----------------|-----------------|
| 一 | おゑずとよみくに | 上江洲の鳴り轟く国 |
| | 御さけや いぢへみど しよる | お酒は泉のよう（にたくさん）だ |
| 又 | おゑずききやれくに | 上江洲の名高い国 |
| | まみきや いぢへみど しよる | お酒は泉のよう（にたくさん）だ |
- 【巻16-1172 重複1035】

「いでみ」が単独で登場する場合は、引用のオモロとその重複オモロの全3例である。これらの事例では、酒がたくさんある豊かな状態を表現するための比喩として登場している。ここでは、清水・水という物質そのものよりも湧き出るという点に注目されており、「いでみ」の語源である「出で水」の性質により近い。

このように「さうづ（清水）」、「いでみ（泉）」という語彙は、井戸の水を意味することが多いが、オモロでは生活のための水を汲んだり使ったりする描写がない。次の八重山の事例には、井戸を使う様子、生命や生活を支える水の供給の重要さが表現されている。

「じらばがぬそーそーま井戸じらば」

略《大意》ジラバガ 区域名 / ソーソーマ井戸の生まれは

3 うむる水

ウムル水

秀梅水(ふだりみず)ば

むつあしょうり

略《大意》村の真中／宮鳥御嶽の側に、井戸の標／水の標を結び立てて、
昼になると人が掻き出しなさり／夜になると神様が掻き出しなさり

10 湧穴水

白水ば

掻し出ししょうり

略《大意》今の生まれの者は水に困ることがなく、羨ましいことだ

秀梅水を

持たせなさり

湧き穴 泉の水

白水を

掻き出しなさり

〔八重山篇・ジラバ15〕

引用のジラバでは、集落の井戸の様子が描写されている。『石垣方言辞典』によると、「ウムリウ」とは植物の葉で造った「液体運搬用の容器」(p168)、「フダリウ」とは柄杓のこと(p943)であるので、引用部分の冒頭に見える「うむる水／ふだり水」とは、容器に入れて運搬してきた水であり、水汲みの必要を示している。このジラバの内容は、ジラバガという区域には井戸がなくて不便なので、村の真中、御嶽の側に井戸(ソーソーマ井戸)をつくった。これにより以後の生活が便利になった、というものである。

この事例には、生命を支える水の重要さが簡潔に表現されている。村の真ん中・御嶽の側に井戸を造るという部分や、昼は人間、夜は神が掻き出す(井戸掘りをする)という部分は、集落の生産や生命に関わる水が、オモロにおける「水」の事例のような祭祀との関わり方とは異なり、より人間の生活に近くはあるが、やはり信仰と繋がるほど重要な事項であることを示している。

2 4 . 抄括

以上でみてきたように、「さうづ」という語彙が用いられる場合、「みづ」に多く見られたような聖なる変若水としての事例も見られはするが、より人間の生活や生命に近く関わる水、とくに井泉の水または井泉そのものを意味する場合は最も多い。「清水」の周辺に「見て羨む」、「泉清水を造成して」といった表現が、定型とはいえなくとも比較的多く見られることは、生活の場面全般における水の必要性を切実かつ直接的に表現している。さらに、オモロにおいて生命を支える水とは、人民の生命のみならず為政者の基盤を支えるものでもあり、末次氏のいわれる「水の王」(末次：1995、p155)を支えるという、祭祀にも政治にも関わ

る面を帯びる。

各地の古謡には、「染水」〔宮古篇・タービ2-39〕のように、井泉の水の用途が具体的に表現されているが、オモロではこうした描写は少ない。これに対し、「息／肝（あよ）を伸ばす」、「世の清水」といった、用途ではなく力に関する表現がみられ、「水（みづ）」の項目でみたような水の持つ霊力も、なお揺曳していることを指摘することができる。

3．オモロ以外の歌謡との対比

ここまでは主にオモロの用例を引きながら、オモロにおける水の役割について考察してきた。歌謡のジャンルが異なれば、登場するものの性格も異なってくるものである。ここではオモロにはみられない性格を与えられた水の事例をまとめ、歌謡ジャンルにおける表現の相違から、オモロにおける事例の特徴を考えたい。

3 - 1．雨と水

雨乞いは古謡の中でも、南島全域にみられるジャンルであるが、水は雨の言い換え表現として用いられることが多い。雨は気象現象のひとつであるが、降雨はすなわち水源の増加につながり、生活に必要な水の補給となる。ことに、オモロでは農業の様子が表現されていないが、古謡では次の事例のように渇水の様子などが表現され、生命・農業生産を支える水の重要性を、より明確に表している。

「大雨乞之時宇根村ニて宇根のろ火の神前江たかへ言」

略《大意》按司襲い／貴み人の、立派な田原／実取り 田 が

88 <u>雨ほしやに</u>	<u>雨欲しさに</u>
89 <u>水ほしやに</u>	<u>水欲しさに</u>
90 <u>みなわれていきよ系</u>	皆割れていくから
91 <u>もるわれていきよ系</u>	諸割れていくから
92 <u>雨おろちへたまふれ</u>	<u>雨を降ろして下さい</u>
93 <u>いぶおろちへたまふれ</u>	<u>いぶを降ろして下さい</u>

〔沖縄篇上・オタカベ3〕

引用部分では、雨の言い換え表現として「みづ」と「いぶ」がみえる。「いぶ」も雨と同義であるが、日本各地の方言で水や湯を指す「おぶ」と同系統の、水を意味する沖縄各地の方言「うぶ」に相当する〔波照間永吉〔監修〕2003年、p23〕。

「雨欲しさ」とはすなわち、大切な田畑を潤す水を希求する意であり、つまり雨と水は、こうした雨乞いの事例においては同義である。

「雨乞いのアーク」

2 くとっさ ゆがふーやいば	今年是世界報 豊年 だから
とぅーかぐシぬ ゆあみ	十日越しの夜雨の
<u>みずぬ たまい かざさ</u>	<u>水が溜まるすばらしさよ</u>

〔宮古篇アーク12〕

上の宮古のアークでも、雨が降った結果として水が溜まる、と表現されている。引用部分の最初にある「世界報」という語から、この部分は豊年、つまり豊かな実りを予祝している。沖縄のオタカベも同様であるが、雨が溜まった水は、貴重な農業用水となる。下線部分の「かざさ」は、直訳すれば「美しいことよ」である。豊作をもたらす風景を美しいと讃えていることで、それをもたらす豊富な水源への希求の強さが表現されている事例である。

『おもろさうし』には、「あめ（雨）」の事例は9例みられる。聖域や祭祀に関わる場合〔巻1-19、巻7-386、巻17-1234〕、航海に関わる場合〔巻10-536〕、涙の比喩〔巻14-999〕として登場するが、上に引いた沖縄や宮古の古謡の事例と同じような農業に関わる事例はない。水は農業生産の基盤であり、農業生産が国や為政者を支え、人民の生命を支えることは自明のことであり、南島に限ったことではない。オモロでは、表現の根底にこの事実は存在するものの、古謡のように具体的に描写されるのではなく、「世の清水」や「（井戸を）見て羨む」という表現に留められる。

オモロに表現された世界としては、海に関しては航海・戦争に関する描写があり、ほかに夜明けの情景など空に関する描写、オモロ研究の一大テーマとなってきた他界観念があげられる。島（陸）に関しては、聖域（杜）、城郭などを讃美するオモロは多い。しかしこれらの世界の中で、当然行われているはずの農業に関する事例はみられない。このことは、恋愛に関するオモロが非常に数少ないこと、死に関するオモロがないことと同様、祭祀の場における歌謡という根本の性格と、王府＝支配者による編纂という書誌としての成立の背景によって生じた傾向であろう。人民や国を支え、生命を支えるという水の側面も無視されていないが、「みづ」の項でみてきたような聖なる霊力を持つ水の事例が目につきやす

く、農業という具体的な生産活動の描写は、オモロではなされていない。

3 2 . 生活用水

オモロをはじめ、これまであげた古謡にみられなかったのは、純粋に私用の生活用水の事例である。以下は、古謡にみられる、公の性格を去った生活用水の事例である。

「たからば一ぬエーグ」

略《大意》裕福なタカラパーの大親は 早朝 / 明け方に 飛び起きて

4 <u>水とらり</u>	<u>水を持ってこい</u>
しゃしとらり	柄杓を持ってこい
やらび	童よ
5 <u>水をぬうしゅ</u>	<u>水をどうされますか</u>
しゃしを	柄杓を
いけしまでか	いかがなさるのですか
6 <u>手をすみで</u>	<u>手を洗い</u>
<u>いなでしゅ</u>	<u>腕を（洗い）たいのだ</u>
やらび	童よ 【宮古篇・アーク39】

早朝に起き、顔や手を洗うという場面である。朝の身繕いの描写は「慶田盛ぬくんちえーまゆんた」〔八重山篇・ユンタ20〕など、他の地域の歌謡にもみられる表現形式である。

この事例に登場する水は、現在の我々が朝の身支度をする場合と全く同じ用途であり、祭祀歌謡におけるような象徴性を持たない、生活用水の事例である。

水道が普及するまでは、このような生活用水は井戸から汲んでくるものであった。水汲みは女子の仕事であるが重労働であり、歌謡の中にその辛さが表現されている。例えば「まへらつ」〔八重山篇・ユンタ40〕は、両親を亡くしたマヘラツという乙女が、親戚の家で召使いのような労働をさせられ、冷遇されるという内容である。マヘラツに課せられる労働の中には「あさかうれ 囃子略 / 水むちく / まへらつ（あさ井戸に降り、水を持ってこいマヘラツ）」〔八重山篇・ユンタ40 1〕と、水汲みが含まれている。

「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」〔宮古篇・アーク55〕は、さらにつらい状況を描写している。主人公（表現主体）は与那国の鬼虎の娘であるが、父親が

宮古の仲宗根豊見親に敗北したため、豊見親の妻の召使いとして働かされることになる。鬼虎の娘は、有力者の愛娘として大切に育てられたため労働に縁がなかったが、敗将の子としての下働きとなり「はいよはい 八重山下司 / 此のバツん水満てる (もしもし、八重山下司 / この水瓶に水を満たせよ)」〔宮古篇・アーグ55 節番号なし〕と水汲みを命じられる。

アーグにはその辛苦が「ユウラジ 地名 を越える時には、刀の刃の上を越すようにつらい / 外間座を越える時は、大溝を越すようである / 藍屋井を下りる時には、厩に行くようである」〔宮古篇・アーグ55 大意〕と、つづさに描写されている。鬼虎の娘が、この水汲み労働の辛さで寝た様子は「七重巻きからずの / 一重巻成るきヤがめ (七重巻の黒髪が / 一重巻になるまで)」と、髪の豊かさを失うことで描写される。

この事例では、身分が転落した鬼虎の娘の悲哀を描写するため、水汲みの辛さが強調されている。それを差し引いても、生活用水は、遠距離を重い水瓶を持って汲んでこなければ手に入らないものであり、潤沢ではなかった往事の水事情を伝えている。「いでみ」の項であげた井泉造成の「じらばがぬそーそーま井戸じらば」〔八重山篇・ジラバ15〕は、こうした水汲みの描写と並べることで、井戸や生活用水の貴重さを推測することができる。

3 3 . 風景としての水

祭祀を離れた、人間同士の感情のやりとりとなる叙情的な内容の歌謡、または劇文学においては、水はここまでみてきた事例とは異なる表情をみせる。

恋愛を歌ったオモロは数少なく、その中に水は登場しない。しかしオモロや祭祀歌謡以外の南島歌謡においては、水は恋愛と結びついて登場する場合もある。

祭祀や信仰の領域から離れた南島歌謡・文学で、「水」に関するものといえば、平敷屋朝敏作の組踊「手水の縁」が想起される。

「手水の縁」〔山戸詞〕

余り水欲しやの
すぎらゝぬあもの、
無蔵よ御情に
呑まち賜れ。

あまりに水が欲しくて
耐えられないので、
貴女、お情けに
水を飲ませてください。

略

とても飲みほしやゝ
無蔵が手水。

とても飲みたいのは
あなたが手ずから汲んだ水です。

〔『伊波普猷全集』第3巻収載『琉球戯曲集』p263〕

ここでの水は、聖なる再生の物質でも、集落の生活の中心となる水でもない。喉の渇きをいやす飲み物ではあるが、主人公・山戸と玉津は、玉津が手づからすくった水を飲むというこの場面から恋に落ちていくのであり、水は物語の展開にとって重要な場面を作るものとして登場している。「手水の縁」の下敷きには、許田の泉で手水をきっかけに結ばれた男女の逸話があるが、こうした「手水」と同様のモチーフは八重山の古謡にもみられる。

「朝花じらば」

10 前出く一そ ぬぎいでく一そ びぎりやま	前に出てくる者が ぬいて来る者が兄 愛しい人
略《大意》意中の人が出て来たら / 抜いて来たなら、どうする	
12 ていびら水(みいじい) うむる水 ぬましようんよ	掌の水を うむる水を飲ませます

〔八重山篇・ジラバ21〕

引用部分にみられる「ていびら水」は、「手水の縁」や許田の逸話に登場する「手水」と同じ、両手を容器としてすくい取った水の意味である。「うむる(ウムリウ)水」についてはすでに触れたが、対語から、ここでは「容器に入った水」ではなく、掌を運搬容器に例えた「ていびら水」の言い換え表現と考えられる。

飲食物を食べさせたり分け合ったりすることは、明快な愛情の表現である。他の食物ではなく、水が選ばれているわけは、解で水や若水の持つ霊力、生活していく上で必要不可欠な物質という、これまでみてきた古謡やオモロ以来の水に対する位置づけ・信仰が、恋の契機としての意味づけの背後に揺曳しているのではないだろうか。

平良高嶺の夫婦樋川の御水(ウベ)や おりか水給と無蔵と別ぬ

〔沖縄篇下『琉歌百控』180〕

安里八幡の松抱る樽 おれが露給と里と別ぬ 〔沖縄篇下『琉歌百控』186〕

上の琉歌2首は、やはり恋愛に関して水が登場する琉歌である。それぞれ固有な名詞は異なっているが、琉歌の大意は「特別な場所の水を飲むと、恋人と別れる

ことはない」という共通した内容である。186は、水ではなく「露」とあるが、ここでは樽（ウスク）におく露と水は同義と考えてよからう。

これらの事例には、先の手水の事例よりも、水の霊力に関する信仰がより強く残っている。恋愛という人間の個人的な営みに関わる点では、オモロにおけるような霊力とは性格が異なるが、基盤となる信仰は同源であり、それに基づいて琉歌という叙情的な形式に表現されているのである。

以上の事例は恋愛に直接関わるものであったが、次の事例は水が比喩として登場する。

「ちんだ入りぬじらま」

略《大意》青年〔歌唱主体〕が、片想いの乙女をどんなに恋しく思うか
というと

5 なちい水

びらぎ水

ふさそーに

略《大意》冷たい水は、夜になると冷たなくなるものだから

7 くみとだき

あわとだき

ふさぬなよ

夏の水が

冷たい水が

欲しいように

米のように

粟のように

欲しいよ 〔八重山篇・ジラバ79〕

青年の、もはや結婚して手が届かない乙女に対する恋愛感情を、夏に冷たい水が欲しい様子に例えている。冷蔵庫などない時代、夏の八重山の真昼に農作業などすることを想像すれば、この比喩表現のもつ切迫感は、現代でも共感することができよう。

これらの事例における水は、冒頭の分類のうち③日常生活に関わる水（生活用水）に含まれるが、生活用水というよりも水を単なる物質としてとらえた表現といえる。聖性は消え、卑近さを帯びる点で、これまでみてきた事例とは一線を画すが、生活に不可欠な物質であるがゆえの身近さがクローズアップされた結果の表現といえよう。

奄美の事例には、請島の「くままんじょ」という女性の美しさを評して「みしれいばちゆたりゆり／たていばむいじはりゆり（くまんと露がしたたり落ちるようで／立てば水が流れるようだ）」〔奄美篇「請くままんじょ節 ちど節」あ

しび歌²¹³ (p 463)] とする表現がみられる。前句の「あがんかり美らさる者や」という部分から、引用部分である下句は、美貌の表現であることが分かる。珍しい事例であるが、流水に仮託した美の表現ということになる。

流れる水というモチーフとしては、以下の事例も想起される。

流れゆる水に桜花うけて 色きよらさあてどすくて見たる よしや

[沖繩篇下『琉歌全集』1438]

上の琉歌は吉屋つる作として人口に膾炙しているが、ここに登場する水は、意味や象徴を持っていない。これまでにみてきた事例は、祭祀歌謡における聖なる物質、あるいは生命を支える水、あるいは組踊「手水の縁」のような物語の展開の契機となるなど、水そのものが何らかの役割を持っていた。しかし上の琉歌においては、落花流水の美しい風景の一部ではあるが、今までにあげた例のような象徴性はない。類似の表現は「流れゆる水に梅の花浮けて」〔琉歌大成 3130〕、「流れゆる水に浮かぶ盃の」〔沖繩篇下・琉歌全集 1707〕など複数みられるが、いずれも水に意味を持たせているというよりは、水が単なる風景として登場している。祭祀歌謡の象徴性からは遠く離れた、単なる身近な日常の風景の描写であるが、これも歌謡における水の性格の一面である。

3 4 . 抄括

オモ口における水は、多くが霊力をもつ物質、変若水として登場する。これに対し古謡では、祭祀の場を離れると生命を支えるものとなり、さらに遊興の場における歌謡や琉歌のような叙情的な歌謡においては、生活用水や、象徴性を失った一風景としての事例が登場する。同じ水という物質でも、歌謡ジャンルによって役割の変化がみられる。

古謡の表現は、生命を支える水としての事例であっても、雨乞いにおける田畑の描写〔沖繩篇上「大雨乞之時宇根村ニて宇根のろ火の神前えたかへ言」オタカベ 3〕や井戸を掘る様子〔八重山篇「じらばがぬそーそーま井戸じらば」ジラバ 15〕などにみられるように描写が詳細で、生活感が強くなる傾向がある。

このような表現の傾向は、各々の歌謡ジャンルの特徴を明確に反映している。

4 . まとめ

『おもろさうし』の水に関する事例を概観すると、「水(みづ)」・「清水(さ

うづ)・「泉(いでみ)」の3つの語彙において、霊力を持つ聖なる物質としての性格が強調されていることが、もっとも明快な傾向である。特に「みづ」という語彙の場合、再生の(解でる)霊力、または霊力を更新する力を持ち、その霊力を貴人にさしあげる、という事例が最も多い。霊力を取り込むには、水を直接身体につけたり、水で濯いだ玉を持つという方法がみられる。

「さうづ」・「いでみ」の語彙においては、水そのものよりも井泉に関わりながら、生命を支えるに不可欠な物質としての性格が表現されることが多い。オモロにおける水の性格は、この「祭祀に関わり、霊力を持つ水」(冒頭の分類①)と「生命・生産を支える水」(冒頭の分類②)の2つに大別される。ただし「みづ」であっても生命を支える水の意味であったり、「さうづ」の場合でも聖なる物質としての性格を揺曳する事例もあり、語彙ごとに画然と意味が分離している、というわけではない。以上については、先行研究でも指摘されているし、オモロをひもとけば一目瞭然である。

水に関して負のイメージを負った事例はオモロには見あたらず、この点においてはオモロ全体でイメージが固定している。これについては、オモロの祭祀歌謡としての性格によるものであろう。祭祀歌謡は神と対話しようとする表現であるから、不吉な語彙や表現は極力用いられないからである。

オモロにおける水のイメージの基本は、特に「霊力をもつ聖なるもの」に求められる。「みづ」の場合の聖なる水としての事例の多さも証左であり、また祭祀に直接は関わらない事例でも、単なる物質としての側面だけを強調する事例は、ないといってよい。その背景には、水の聖なる力への信仰と、命を支えるものとしての必要性が同時に存在する。

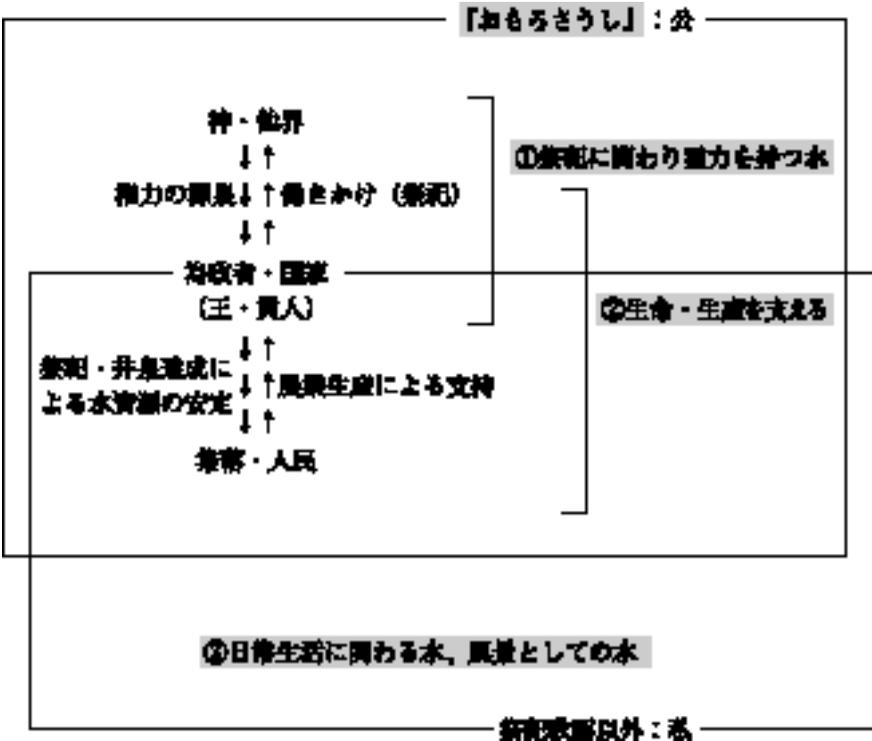
オモロにおける水の霊力とは、王や貴人に捧げるべき再生の生命力であり、神女が玉を濯ぐことによってとりこむ宗教的権威である。生命を支える水の場合は、王や神女は祭祀によって人民の生活を守護し、支えられた人民は生産によって国家を支える。祭祀という信仰に関わる行為に依りながら、末次氏がすでに指摘しているように、その実は非常に政治的な目的を内包している。その背景には、霊力でも、生命を支える役割の場合でも、集落や国・為政者という公との結びつきがある。

これに対し、3の「オモロ以外の歌謡との対比」の項で概観した、祭祀を離れ

た場の古謡や叙情的な内容の歌謡においては、私的な感情としての表現が登場してくる。冒頭で分類したうち③生活用水や風景としての水は、オモロには全くみられない、というよりも歌謡の性格として相容れないものである。事例を概観すると、①・②に共通する公の性格を持たない③は、私的な用途の事例であり、オモロや祭祀歌謡とは対極の位置にある性格といえよう。

古謡には、水によって支配に関する霊力を更新する支配者は描かれていない。言い換えれば、国王に霊力を奉り、霊力を更新して支配を盤石にするという結果をもたらす役割を水が担うという事象は、『おもろさうし』における水と、地方の古謡を分ける特徴である。古謡にあってオモロにないのは、雨乞いなどにみられる農業に関わる描写や、井戸を造営し、それをを用いるようすといった、生命を支える水の実態の描写である。この事実は、水の霊力についての信仰は南島古来

〈図〉



のものであるが、王府の祭祀歌謡としてのオモロでは、その信仰が国王の靈力を維持し高めるという用途に、いわば発展・流用された結果と考えられる。王府の編纂になるという『おもろさうし』の性格や成立からして、当然といえば当然ではあるが、水という語彙の用例は、信仰に深く関わる語彙でありながら、祭祀歌謡オモロが持つ政治的な性格をもあぶりだしている。

註

- 1 「オモロの表現者」とは、簡潔には「オモロをうたった（言語・声で表した）人々」というほどの意味である。「表現者」という語を用いた理由は、オモロは当時の人々の思想・信仰・世界観などの、言語という形での表現であること、さらに、言語表現の分析によってこれらを明らかにするという研究の目的を強調するためである。
- 2 オモロ本文の表記は、岩波文庫本の表記に依った（改行・濁音を付すなどの加工がなされている）。反復部は、解釈部分を一字下げて示した。解釈は岩波文庫本の脚注に依りつつ、より逐語訳的・詳細になるように適宜改変した。『大成』の歌謡の解釈は原則として『大成』に付された解釈を引用したが、引用の意図を明確にするため、改変した箇所もある。
オモロ・古謡ともに、必要部分のみ原文・解釈を示した。引用部分の途中で省略部分がある場合は、改行して 略 と示したが、前後の場合は注記しなかった。
古謡の引用部分の冒頭には、『大成』に付された歌謡のタイトルを「」で括って示し、各節の冒頭に『大成』に付されている節番号を付した。オモロの節名は略した。
末尾に、オモロの場合は〔巻 通し番号〕、『大成』の歌謡は〔地域名 歌謡番号〕という形式で、テキストにおける位置を注記した。
- 3 赤嶺政信氏の以下の論考を参照した。「トゥハシリをめぐる諸問題」『沖縄民俗研究』第6号収載、沖縄民俗研究会1986年、および『シマの見る夢 - おきなわ民俗散歩 - 』ボーダーインク、1998年。
- 4 例えば『おもろさうし』「石金（いしかね）の様に / 命 継ぎよわれ」〔巻8-456〕、「石が命 / 金が命（みおやせ）」〔巻11-635〕のほか、「うるじん / 若夏な 大穂 / 長穂 出じ 石ぬ稔る / 金ぬ稔る 真粒玉 給うらりていり」〔種取りの願い（竹富島）〕八重山篇・ニガイフチィ140〕など。「石 / 金」は、奄美から八重山まで、南島全域で用いられる対語である。なお、「石も金も堅くはないが、人間こそ堅い」

〔宮古篇・諺13 大意のみ〕のように、堅固さの比喩ではない事例も皆無ではない。

《テキスト・参考文献》

外間守善・総編集『南島歌謡大成』全5巻、角川書店、1978～1980年

山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局、1979年

外間守善『日本語の世界9 沖縄の言葉』中央公論社、1981年

おもろ研究会『おもろさうし精華抄』ひるぎ社、1987年

N.ネフスキー・岡正雄・編『月と不死』東洋文庫185、平凡社、1994〔1971〕年

沖縄古語大辞典編集委員会・編『沖縄古語大辞典』角川書店、1995年

末次智『琉球の王権と神話 「おもろさうし」の研究』南島文化叢書16、第一書房、1995年

外間守善・波照間永吉・編『定本 琉球国由来記』角川書店、1997年

波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』弧琉球叢書4、砂子屋書房、1999年

外間守善・校注『おもろさうし』上下 岩波文庫黄142-1・2、岩波書店、2000年

日本歴史地名大系第48巻『沖縄県の地名』平凡社、2002年

沖縄県教育文化資料センター『新編 沖縄の文学』編集委員会・編、波照間永吉・監修『新編 沖縄の文学』沖縄時事出版、2003年

宮城信勇『石垣方言辞典』沖縄タイムス社、2003年

波照間永吉・編『琉球の歴史と文化 - 「おもろさうし」の世界 - 』角川選書421、角川書店、2007年

《謝辞》沖縄県立芸術大学大学院の波照間永吉先生には、多くの貴重なご批判やご助言をいただいた。また照屋理氏をはじめ、波照間ゼミの方々からも多くのご意見をいただいた。本稿に口頭発表時の原案よりもましな部分があるとなれば、上記の方々のおかげであり、論の不足は偏に筆者の力不足による。また芸大附属研究所の上原幸枝、坂口都子の両氏には、事務面で多大なるサポートをいただいた。深謝申し上げる。

